

◆ 第 74 期 第 3 回研修会 報告 ◆

2024 年 11 月 7 日（木）15 時から 17 時まで、国立国会図書館見学会を開催しました。当日は 14 名様にご参加いただきました。最初に国会図書館新館会議室にて、国立国会図書館館長 倉田敬子様よりご挨拶を頂戴しました後、15 分程度の広報映像を視聴しました。その後、7 名ずつのグループに分かれて、収集部門・書誌作成部門（本館 1 階）、資料保存部門（新館 1 階）、書籍を保管する本館書庫、雑誌・新聞を保管する新館書庫、利用者サービススペース、修復部門を約 75 分かけて、職員の方に解説をしていただきながら巡りました。

収集部門は、国内で刊行されている膨大な数の書籍を収集し、収蔵に際して、その書誌情報を作成、分類する部署で、一般市場に流通している書籍は、取次提供の情報をベースに、大学刊行物などは、精査して仔細な分類登録を施していました。

次に資料保存部門に案内いただきました。消失点があるかと思わせるほど長い通路の両側に延々と居並ぶ書架の列に、おびただしい数の書籍が隙間なく棚差しで分類保管されており、思わず嘆息を漏らすほどの圧迫感がありました。通常建築であれば 2 階分の高さを 3 層に分けて天井を低くすることで、書架の最上段にも人の手が届くように空間の有効利用がなされているとのことでした。このほかにも、来館者への提供時間を短縮するため、閉架陳列方式を採用している国会図書館ならではの創意工夫が随所に見られました。また、書籍は造本コンクールに出品された書籍など一部を除いてほぼすべてがカバーをはずして保管されていました。圧着フィルムでカバーごと保管するほかの公共図書館と異なるのは、耐用年数の短い圧着フィルムを使用しないことで長期保管を可能にするための工夫だそうです。

次に、地下の雑誌書庫へご案内いただきました。新館が建設された当時は、雑誌刊行点数が多かったこともあり、広いスペースを確保していたとのことでした。漫画雑誌の書架では、「少年サンデー」の創刊号など稀覯本^{きこうほん}を拝見しました。国会図書館では、可能な限り刊行時のままのかたちでの保管を目指しておられるとのことでしたが、経年劣化などで損傷がある場合は、背を外すなどの補修をせざるを得ないものもあるとのことでした。懐かしい誌面や掲載広告は、今や時代の流れを雄弁に物語る貴重な資料となっており、参加者にとって得難い時間となりました。

さらに新館地下 8 階の新聞が保管されている書庫へご案内いただきました。新聞は原則、製本され平置きにて保管されていました。省スペース、資料原本の保存、サービス向上のためデジタル化を進めている旨のご説明がありました。書架の一角にて、1923（大正 12）年の関東大震災後の報知新聞の現物を見せていただきました。紙は経年により変色しておりましたが、丁寧につくられた紙面は、今も鮮明で、当時の動乱の息遣いが伝わるものでした。

その後、補修室へ伺い、傷んだ書籍の補修現場で職員の方々の作業を実際に拝見しながら、ご説明をしていただきました。和書と洋書では、その作業は大きく違うそうで、虫食いや破れ、本の開閉による劣化などを丁寧に修理修復しておられました。可逆性を意識して作業されていることで、補強に用いる和紙の種類へのこだわりや、接着剤などの有機化合物の剥離処理も行っているそうで、作業場は隅々まで整理整頓された工房のような趣がありました。

最後に研修室に戻り、国立図書館の資料収集と電子書籍・電子雑誌の収集制度について解説をしていただきました。2023（令和 5）年より始まった取り組みにより、有形の出版物だけでなく

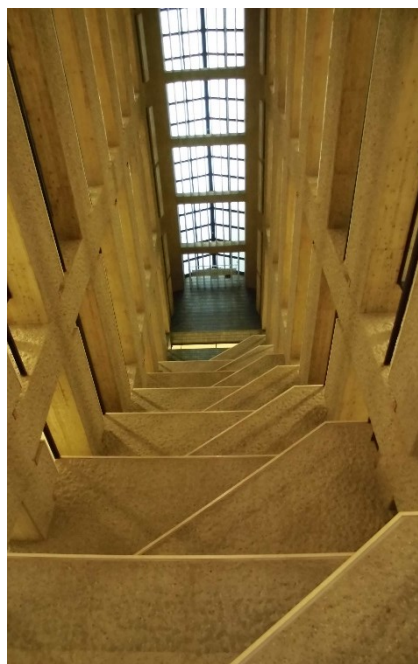
無形の電子情報の収集にも力を注がれているとのことでした。書籍の頒布者であり納品義務者でもある出版事業者の協力が欠かせない点についてもご説明がありました。

国会図書館職員の皆様が黙々と仕事に取り組まれている姿を目の当たりにし、その弛まぬ研鑽が膨大な国内文化資産の保全・継承へと注がれていることに深い感銘を受けるとともに、書籍刊行に携わる者として、背筋の伸びる想いがいたしました。

(研修委員長 片岡 一成：恒星社厚生閣)



書架の様子



光庭



研修の様子